

班で相談して解決しましょう

1 はじめに

先日、理科の授業を見せてもらいました。その先生は、学習課題に取り組むとき、「班で相談して解決しましょう。」と指示していました。なぜ、そのような指示をしたのか尋ねたところ、次のように教えていただきました。

「分からないことは班の子に聞きましょう」と指示すると、聞く人と聞かれる人が固定化されていく危険性がある。聞く人と聞かれる人が固定化されてしまうと、聞く人が聞きにくくなる。これを避けるために、「班で相談して解決しましょう」と指示しています。

2 「分からないことは班の子に聞きましょう」と「班で相談して解決しましょう」について

分からないことをそのままにしておいても、誰かが親切に教えてくれるということはありません。しかし、社会人になれば、そういったことは極めて少なくなると思います。社会人になれば、分からないことは自分から解決するために動き出さなければならないということが多いのではないのでしょうか。解決するための情報や方策を自ら探し出すということです。そのための訓練を中学生からするべきだと考えます。そういった意味で、「分からないことは班の子に聞きましょう」という指示は重要です。時には、『分からないときは、「これどうするの?」と聞きましょう』と、聞き方を教えることも必要です。

「早くできた子は分からない子に教えてあげてね」という指示は、教える子と教えられる子が固定化される危険性があり、この指示は良くないです。教える子が教えられる子を上から目線で見ると(自分より下に見る)ことが実践からも明らかになっています。

これまで、学習課題に取り組むとき、学びは個人であるから、「班の形になって個人で取り組みなさい。分からないときは班の子に聞きなさい。」と指示することが有効だと考えてきました。しかし、今回授業を見せていただき、授業者から、「分からないときは班の子に聞きなさい」という指示では、聞く人と聞かれる人が固定化されていく危険性があり、関係が固定化されてしまうと、聞く人が聞きにくくなる。そこで、班で相談しながら解決しましょうと、指示している。」と伺いました。確かに、「聞く聞かれるという関係が固定化したために、いつも聞く子は、聞かれる子が課題を解決するまで、聞くことを待っている。」といったことを聞いたことがあります。まさしく、授業者の言うとおりです。

聞く聞かれるという関係性を固定化させないために、「班で相談しながら解決しましょう」という指示とともに、折に触れ、「分からないことがあったら自分から班の子に聞きましょう。」という指示も入れていくことが大切だなと思いました。

3 おわりに

これからは、この二つの指示で学習課題に取り組ませたいと考えます。

ぜひ実践していただき、成果と課題を共有したいものです。